

目 次

はじめに	園長 永原 恵三 …	1
I. 本年度の研究テーマについて	伊集院 理子	
1. これまでの研究の流れ		5
2. 平成 20 年度の研究「環境に対する豊かな感受性を育む」について		8
II. 実践事例		
1. 小さな生き物との関わり		
(1) 小さな生き物との出会いの姿		
<資料> 園庭の自然マップ		
①実践事例	上坂元 絵里・北村 京子 高橋 陽子・吉岡 晶子 …	15
②まとめ	高橋 陽子 …	29
(2) 小さな生き物との関わりの深まり		
①実践事例	佐藤 寛子・吉岡 晶子・渡邊 満美 …	31
②まとめ	佐藤 寛子 …	48
(3) 小さな生き物との関わりから見えてきたこと	高橋 陽子 …	49
2. 園庭の実りをめぐって		
(1) 畑の作物との関わり	伊集院 理子 …	53
(2) 収穫物との関わり	伊集院 理子・上坂元 絵里・北村 京子 吉岡 晶子・高橋 陽子・宮里 暁美 …	59
(3) 園庭の実りとの関わりから見えてきたこと	上坂元 絵里 …	72
3. 専門家の協力を得た活動	宮里 暁美	
(1) 2年間の取り組みの経過と概要		76
(2) 虫博物館の取り組み		78
(3) 年末草刈協力		85
(4) 日常的な虫博士との関わり		88
(5) 専門家の協力を得た活動から見えてきたこと		92
III. 研究のまとめと課題	伊集院 理子 …	99
IV. 資料		
1. 幼稚園 学びの概要		105
2. 幼・小接続期 学びの概要		106
3. 一年間の「食」に関連する体験		107
4. ヤモリとの出会いと関わり		108
おわりに	副園長 宮里 暁美 …	111

はじめに

園長 永原 恵三

本園はお茶の水女子大学のキャンパス内に位置し、大学全体が育んできた自然環境の中で、都心とは思えないほどの豊かな自然に包まれています。園庭はこの大塚の地のもつ土地の起伏を活用して、変化に富んだ構成になっており、回遊式の日本庭園のごとく、四季折々の自然を楽しみながら、子どもたちが遊べるようになっていきます。昭和8年にお茶の水からこの大塚に移転したときに、当時の主事、倉橋惣三の理念を反映するかたちで園庭が造成されて以来、70年以上の年月を経て今日に至っています。

子どもたちは、日々過ごす園での生活のなかで、さまざまなあり方で自然環境と関わっています。その関わりは個人的なものから複数、そして集団によるものまで、子どもたちの多様な活動をしつかりと支えるものであり、また保育にとって非常に重要な側面であります。

子どもたちや保育者と深いつながりのある自然環境は、とくに日本人にとっては、人間の生活と一体化しており、自然に育まれながら生活すること、つまり自然と融和しながら生活していることを、私たちは、当然のこととして受け止めています。それゆえに自然を観察の対象として捉えることは、まるで自分の生活を自分の中で客体化して観察するのと同じぐらいに難しいことです。とはいえ、保育という教育活動を考えるときには、やはり、自然環境というのは、まさに「環境」すなわち「まわりに存在するもの」なので、自然環境を明確に人間の主体と切り離して考えるという、西洋的な思考もまた必要であり、そうするときにはじめて、自然がどのように子どもたちと関わっているのかを、具体的な事例を通じて考察することができると考えられます。

幼稚園はひとつの教育施設ですから、教育の「環境」を整備することはその大きな課題の一つです。建物の内外にある遊具などの道具を整えることも、たしかに環境の整備ですが、それだけでなく、自然環境の整備もまた施設面での重要な課題です。この研究では、子どもたちの園生活において、いかに自然環境が深く関わっているかを事例から考察し、子どもと自然との関わりのみならず、その関わりを支える自然環境自体を、保育という視点から検討しています。

平成20年度の研究を糸口とし、子どもと環境に関する研究をさらに積みかさね、豊かな感受性を育むために自然環境をどのように整えていくのかという課題について、今後にわたって取り組んでいきたいと考えています。

おわりに

副園長 宮里 曉美

私たちは「環境に対する豊かな感受性を育む」を研究テーマとし、1年間研究に取り組んできました。身近な自然と出会い、驚きや喜び、時には戸惑いや悲しみも味わいながら、様々な活動を展開している子どもたちの姿を記録し、事例をもとに話し合いを重ねてきました。と同時に、今ある環境をさらに豊かなものにしよう、という考えのもと、環境の見直し・改善も進めてまいりました。

研究が進むにつれて、自然に対する教師自身の関心が高まっていきました。教師自身が好奇心旺盛に身近な自然に関わるようになり、不思議な生き物に出会うと「これ何かな？」と尋ね合ったり、互いに発見を伝え合ったり、保育後の話し合いの中にも自然との関わりのことが多く登場するようになりました。

このように、教師自身の意識が変化する中で、今までなら見過ごしてしまっていたかもしれない「小さな」しかし「貴重な」子どもたちと身近な自然との関わりを丁寧に受け止めるようになっていったと考えます。共感的に丁寧に受け止められることで、子どもたちと自然との関わりは継続的なものとなり、継続した体験の中で、子どもたちの中に様々な気づきが生まれてきています。

本研究は、教師の意識変革や子どもたちの遊びの豊かさを生み出すきっかけとなっています。本研究はまだ始まったばかりであり、今後さらに実践を積み重ね研究を深めていきたいと考えます。

最後になりましたが、ご指導いただきましたNPO法人日本アンリ・ファーブル会の皆様、本大学の先生方、附属学校園の先生方、自然との関わりを共に創り上げた子どもたちや保護者の皆さまに心より感謝申し上げます。

研究同人

園長	永原 恵三	教諭	佐藤 寛子
副園長	宮里 曉美	教諭	北村 京子
教諭	吉岡 晶子	養護教諭	渡邊 満美
教諭	伊集院 理子	非常勤講師	三橋 礼子
教諭	上坂元 絵里	非常勤講師	鈴木 由布子
教諭	高橋 陽子	非常勤講師	櫻 澤 あや子